

# 横光利一「時間」とベルクソン

山本亮介

## 1

横光利一の名実ともに代表作と言える作品「機械」は、以後横光が真正面から取り組んでいくことになる幾多の問題群を内包していた。それらの展開を多角的に検証することが、横光の全体像およびその可能性を正当に見極めるために必要不可欠な作業であると思う。が、とりわけ「機械」以後の活動という観点から、さしあたって整理しておかねばならない論点は、作品内の思考、論理において消化不良のまま放置されていた「見えざる機械」の位相についてである。<sup>(1)</sup> 作品に展開された作家横光の思考も、語り手「私」の認識論的自問自答も、厳密な哲学的議論としては限界があることは言うまでもないが、そこで立ち現れた「見えざる機械」の位置という問題、すなわち、「唯心的」な「私」に内在するのか、あるいは超越的存在として外在しているのか、という問いに横光が無自覚であったとは限らない。むしろこの時期、認識論と「神」の存在との関連について述

べていたことを考えると（「肝臓と神について」昭五・一）、人間の思考の極点に設定される「何ものか」が常にその念頭に置かれていたと言えるだろう。

この問題を見るのにふさわしい作品が昭和六年四月に発表された「時間」である。「時間」は、「鳥」（昭五・二）以降のいわゆる「心理主義」時代の作品であり、特に、肉体的精神的極限状態にある集団内に生じる事件を描きつつ、その渦中における自己の心理を一人称「私」が語り、検証していくという作品構造の類似性から、「機械」の延長線上にある作品として、従来から様々な形で言及されてきた。<sup>(2)</sup> 本稿もその観点に基づく考察であるが、なかでも「機械」からの展開を考える上で注視するべき点は、曖昧な位置にあった「見えざる機械」が、作品「時間」において「時間といふ恐るべき怪物」として再定義されていることである。また、「身体」に流れる「時間」の発見という作品に提示された主題に、文壇に限らず、様々な領域において浸透していたベルクソン哲学の影響を見てとることは容易である。先回りになるが、ここにこそ、「機械」の執筆を促したヴァレ

リー思想から歩を進め、懸案であつた認識論的アポリアにひとまず決着をつけようとした横光の思考が賭けられているとみられるのだ。これらの問題を検証するためにも、まずは作品内容について、以上に掲げた文脈をもとに解説することから始めたい。

## 2

「時間」では、雇い主の座長に金を持ち逃げされ、深夜雨中の逃避行を余儀なくされた男女の集団における極限状態が、一人称「私」によって語られていく。「機械」と同様に、そうした状況下における「私」の心理の動きが分析的に綴られるのであるが、その過程で小説の主題である「時間」が様々な形で表出される。最初に「時間」が「私」の意識の俎上に現れるのは、不安と猜疑に満ちた深夜の逃避行において精神的に追い詰められ、かつ極度の空腹に襲われた時点であった。

(…) いったい此のさきまだどこまでも闇の中を続いてゐるさうな断崖の上をどうして越えきることが出来るのかと、むしろ暗澹たる気持ちになつて来た。さうなると私達の頭は最早や希望や光明のやうなはるかに遠いところにあるもののかとは考へないで、此の二分さきの空腹がどんなになるであらうか。此の一分さきがどうして持ちこたへられるのであらうかと、頭はただ直ぐ次に迫つて来る時間のことばかりを考へ続け、その考へら

れる時間はまた空腹そのことについてばかりとなつて満ち、無限に擴がつた闇の中を歩いてゐるものは私ではなくして胃袋だけがひとりごそそと歩いてゐるやうな気持ちがされて、これはまつたく時間とは私にとつては何の他物でもない胃袋そのものの量を云ふのだとはつきりと感じられた。

ここでは、遠い未来(の時間)を想像する力が摩滅しており、「私」の思考の遲滞に決して同調することのない、絶えず更新されていく流れる「時間」のみが意識されている。この切れ目なく流れている「時間」においては、「頭はただ直ぐ次に迫つて来る時間のことばかり」になつてしまい、「私」の意識に固定化された「現在」は存在し得ない。たとえば、ベルクソン哲学では、「流れる心理的生命」の「生地」である「時間」とは、「これほど手応えがありこれほど実質的な生地はほかにない。けだし、私たちの持続はつぎつぎに置きかわる瞬間ではない。であればどうしても現在しかないことになり、過去が現在へ延びることも、進化も具体的な持続もなくなるであらう。持続とは過去が未来を嚙つてすすみながらふくらんでゆく連続的な進展である。」とされている(『創造的進化』真方敬道訳／岩波文庫)。「私」が意識している「時間」とは、状況からして非常にネガティブな形ではあるが、こうした「持続」の「連続的な進展」であり、その「手応え」であると言えよう。逆に言えば、ベルクソンが否定したような、知性・科学的認識によって分節された「時間」のあり方が、この場面において捨象されることになつたとも考えら

れるのだ。<sup>(3)</sup>

また、その「時間」——「持続」を認識する直接の契機となつてゐるのが、「空腹」によつて顕在化した「私」の身体性である。「胃袋」を媒介として意識された「私」の身体が、「持続」の「手応え」を本能的（直観的）に感受しているのである。そこでは、「考えられる時間」——知性によつて分節され、把握される時間——は「空腹」によつて占拠され、その思考主体である「私」、つまり精神的存在であつた「私」は、「胃袋だけがひとりごそと歩いてゐる」というような身体的存在としての側面に追いやられてゐる。こうした「私」の意識形態の推移は、横光の身体論的な思考によつて生み出されたものと言えるだろう。たとえば、市川浩は「精神としての身体」（勁草書房昭五八・三）の中で、人間の精神と身体という二つの側面を、「生きてゐる具体的全体としての生成的構造を、当面の関心にしたがつて、統合のあるレヴェルの特性へと還元した極限概念」と規定し、その自覚のあり方について、「統合の度合いがきわめて高く、環境の支配からより解放され、可能的世界をも自らの世界とすることができるとき、われわれは精神を自覚する。（…）逆に統合の度合いが低く、現実的刺激としての環境に支配され、自由度がせまめられたとき、われわれは身体を感じる。」と説明している。「私」は、「可能的世界」の広がりとも言える「希望や光明のやうなはるかに遠いところにあるもの」を想起し、「精神を自覚」し得るやうな状態にない。「現実的刺激」——「空腹」という肉体的条件によつて「支配され」て、

ただそれを耐え忍ぶのみという「自由度」の極めて低い状態にあり、それによつて強く自己の「身体」——「胃袋」を自覚するのである。

さらに、こうした「身体」性の顕現と、「時間」——「持続」の認識との関連について、「全く純粹な持続は、自我が生きることに身をまかせ、現在の状態と前の諸状態とを分別するのを止める時、意識状態の継続のとり形である。」（『時間と自由』服部紀訳／岩波文庫）というテーゼをもとに、「私」の「意識状態」の側から考えることも可能である。「胃袋」が歩いてゐるやうな身体的存在——「私」における自我は、ここでは「生きることに身をまかせ」てゐるだけであり、圧倒的な「空腹」の支配によつて、自我——「頭」の「現在の状態と前の諸状態」を「分別する」ことが不可能になつてゐるのである。その結果、「私」の「意識状態の継続」は、「純粹な持続」へと傾斜していくのだ。以上のような肉体的精神的極限状態の中で、自己の内部体験として「私」が意識した「時間」こそ、ベルクソン哲学に示された真の流れる時間としての「純粹持続」であつたと言えるだろう。

また、ベルクソン哲学において、基本的に「純粹持続」へと至る方法として定義される「直観」の概念を、作品「時間」から読み取ることも可能である。このことは右で見たやうな「空腹」と「時間」の場面にも当てはまるのであるが、特に、最後に一団が辿りついた水車小屋の中で「私」が再び見いだす「時間」は、「直観」の問題と結びつくことでより深化したイメージを持つて表象されている。そ

ここでは、激しい疲労と寒さによつて「眠り」に陥っていく「私」の意識に「時間」が立ち現れる。

(…)今眠れば死ぬにちがひないことを説明し眠る者があつたら直ぐ、その場で殴るやうと云ひ渡した。ところが意識を奪ふ不思議なものとの闘ひには武器としてもやがて奪はれるその意識をもつて闘ふより方法がないのだから、これほど難事しいことはない、と云つてゐるうちにもう私さへ眠くなつてうつらうつらとしながらいつたい眠りといふ奴は何物であらうと考へたり、これはもう間もなく俺も眠りさうだと思つたり、さうかと思ふとはッと何ものとも知れず私の意識を奪はうとするそ奴の胸もとを突きつけて起き上らせてくれたりするところの、もう一層不可思議なものと対面したり、そんなにも頻繁な生と死との間の往復の中で私は曾て感じた事もない物柔かな時間を感じながら、なほひとしきりそのもう一つ先きまで進んでいつて意識の消える瞬間の時間をこつそり見たいものだと思つたりしてゐると、また思はずはッと眼を醒して自分の周囲を見回した。

この場面では、「眠り」とそれに抵抗する「意識」との葛藤において、「意識」と「意識を奪ふ不思議なもの」との困難な闘いが生じ、その過程に「意識」の味方のような「もう一層不可思議なもの」が出現するという「私」の内部体験が描かれている。「私」は覚醒した「意識」の状態から「眠り」へと徐々に傾斜しながら、その内部に次々と「何物か」を発見していくのであるが、このことは「眠り」

を契機として、理解不能な自己の「意識」の深部へと下降していく経過を示していよう。そしてついに、「意識」―覚醒と「眠り」との間、つまり「生と死との間の往復」によつて、「私」はそこに存在する「曾て感じた事もない物柔らかな時間を感じ」る地点にまで達するのである。

ベルクソン哲学における「直観」の本質および機能は、「それ（直観―引用者注）は知性がとらえる空間的な並置ではなく、時間的な継起を、内部からの生長を、過去が切れ目なく現在のうちに延び、現在が未来を蚕食する持続をとらえる。それはまず何よりも精神が精神を直接見ることである。したがつて直観は、まず第一に意識を意味するが、それは直接的な意識であり、見られた対象からほとんど区別されない視覚、対象にじかに触れ、対象と一致さえする認識である。第二にそれは、無意識の縁に迫る拡大された意識である。それは光と闇のすみやかな交代をとおして、無意識がそこにあることをわれわれに確認させる。」<sup>4</sup>と要約されるが、このことを引用の場面に対応させてみたい。「意識」と「眠り」との葛藤における「私」の内面描写は、「精神が精神を直接みることにほかならず、そこでは「私」の「意識」が、「見られた対象」であり、かつまたそれを認識しようとする「直接的な意識」であるという両義性を持つてゐることから、必然的に「対象と一致」するような「直観」として機能することになる。そうした「私」の「意識」は、「生と死の間の往復」からさらに眠りの方向へ進み、「意識の消える瞬間」に接近していく

のであるが、これは「直観」が、「光と闇のすみやかな交代」を通して「無意識の縁」へ迫ることであると解釈し得る。つまり、「眠り」の場面での「私」は、「直観」によって自己の内部を捉えているのであり、そこで認識される「物柔らかな時間」とは真の「持続」であつたと言える。さらに、ベルクソンが、「現に、眠りは、器官の機能の働きを緩め、殊に自我と外的事物との間の交通の面を変へるのである。その際には、もはや持続を測るのではなく、感ずるのである。持続は分量から性質の状態に帰る。」（「時間と自由」と、「眠り」の機能について述べていることをここで考え合わせてもよいだろう。

先の引用部分に続いて、「私」は「眠り」から一歩進み、現実に迫り来る「死」に対する感覚を強く意識する。そして、一団が朦朧とした意識のなかで殴り合う場面においては、「時間」はそうした「死」との関係において語られることになる。

快樂——まことに死の前の快樂ほど奥床しくも華かで玲瓏としてゐるものはないであらう。まるで心は水水しい果汁を舐めるがやうに感極まつてむせび出すのだから、われを忘れるなどといふ物優しいものではない。天空のやうに快活な気体の中で油然と入れ変り立ち変り現れる色彩の波はあれはいつたい生と死の間の何物なのであらう。あれこそはまだ人人の誰もが見たことのない時間といふ恐るべき怪物の面貌ではないのであらうか。肉体的精神的極限から自己の身体を強く意識し、その状態から「眠り」へと向かう途上で、「私」の内面への眼差しは「直観」となり、

そこに流れる「時間」を捉えたのであるが、「死の前」に至つたこの場面では、遂に實在性を持った「時間」を幻視することになっている。ベルクソン哲学では、知性から解放された「直観」は、自己の生命の内奥部への認識を可能にするものであり、そこに流れる「純粹持続」の存在を見いだす能力でもある。「私」が見た「人人の誰もが見たこともない時間という恐るべき怪物の面貌」とは、その「純粹持続」に他ならない。この「時間」——「純粹持続」が、「恐るべき怪物」と形容されているのは、「見えざる機械」と同様に、人間を動かす見えない力として感じられているからであらう。だが、「直観」によって捉えられた「時間」とは、自己の生命と不可分な内的事象である。「私」は、「われを忘れるなどといふ物優しいものではない」という程の「快樂」を感じながらその「時間」に入り込み、自己の意識をそれと一致させた状態で、自己の生命の根源、つまり「生と死の間」に流れる「純粹持続」としての「時間」を内側から眺めているのである。これは、知性的な認識では不可能なことであり、「私」の身体を通してもたらされた「直観」による、「生きたもの」としての「時間」の把持だと言える。<sup>(5)</sup>そして、生命の流れとしてのこの「時間」によって、「私」、集団、さらには病人さえもが「生」の方向に押し進められ、結果束の間ではあるが一団は救われるのである。

以上のように、作品「時間」における「私」の内部分析、およびその「時間」の表象には、ベルクソン哲学の影が認められる。とりわけ、「機械」の地平上に、「意識」と「身体」のはざまに流れる「時間」という不可知の力の領域を指定したことは大きな意義を持つであろう。ただし、同時にここで強調しておきたいのは、「機械」においてまた、「身体」性が自我―「心」との関係において顕在化する局面が描かれていることである。見過ごされがちな叙述であるが、「私」は「軽部」とのかみ合わない、解消不能の対立関係の中で、「終ひには自分の感情の置き場がなくなつて」しまい、「全く私は此のときほどはつきりと自分を持てあましたことはない。まるで心は肉体と一緒にぴつたりとくつついたまま存在とはよくも名付けたと思へるほど心がただ黙々と身体の大きさに従つて存在してゐるだけなのだ。」と述べているのだ。作品の主眼が、「私」の思考・判断が停止する地点に顕現する「見えざる機械」の表出であることは言うまでもないが、この場面ではその代わりに「私」の「身体」性が前景化している。つまり、他者関係と自意識の葛藤相における自己喪失と「機械のやうな法則」による支配という文脈の一方、「私」は、「心」と「身体」の一致した状態を人間「存在」とみなすことで、迷走に陥る寸前の自己を整理してもいるのだ。こうした「心がただ黙

黙と」したままの状態ならば、結末部の自己破綻は免れたかもしれない。そして、作品「時間」においては、「見えざる機械」という超越的存在を「身体」に内在する「時間」に置換することで、非決定性の不安に晒されている理性的思考と、自己の「身体」性に依拠する「心」という二つの方向を潜在的可能性として内包する「私」が、後者の道へと牽引されていく様相が描かれているのである。やや図式的ではあるが、「精神」から「身体」へのバイアスの移動に集約されるような、「機械」から「時間」への移行過程にこそ、ベルクソンの思想と作家横光との関係が位置付けられるべきなのだ。

ところで、「機械」執筆の基盤の一つには、当時移入され始めたヴァレリーからの強い触発があった。「形式主義文学」から、ヴァレリーの思想に打ち出された「精神の運動」の解明へと、文学的探求の方向を転回していった昭和五年前後の横光であるが、その背後には一貫して人間の認識をめぐるアポリアが存在していた。客観―「物」に認識の基礎を置き、文学表現・理論に適用していくという試みが頓挫した地点に、理性的思惟の極点に現れる「純粹自我」をあらゆる存在の頂点に据え、認識のメカニズムに一つの解答を示したヴァレリー思想が現れたのである。<sup>(6)</sup>ただし、唯物論的認識が構築する機械論的世界観が、ある種のニヒリスティックな色彩を帯びるのと同様に、ヴァレリーが示す「純粹自我」の地平もまた、「虚無」をめぐる問いに帰着するものであった。横光はそうしたヴァレリーの著作を「悪魔の聖書」と呼び、その「虚無」的側面を強く意識して

もいたのである。確かにヴァレリーからの影響によって、外的事象の描写と人間の内的現実の表現との間を彷徨していた横光の文学活動は、明確に後者を対象とするものになった。が、認識論的アポリアに基づく不可知論の呪縛から解放されることはなく、人間の思维の限界とそれを超越する存在の力に「虚無」を抱く感覚はさらに増幅していったのである。そして、「機械」において、外的事象の関係を統御する形而上的存在であり、かつ「私」の心理に描かれた思考上の産物でもある超越的存在——「見えざる機械」が生み出された。それは、唯物論的認識か唯心論的認識に関わらず、そうした人間の思考構造自体が「虚無」的世界観を必然的に胚胎する根源であることを、文学表現として問う試みであったと見てもよいだろう。

既存の思考体系における人間精神の行き詰まりと「虚無」の出現。作品内容と作家の思考との座標点を探るならば、「機械」と横光の關係はここに集約されるであろう。そして、おそらくこの文脈においてベルクソン哲学は摂取されたのだ。たとえば、後年横光は「僕は哲学者ではベルグソンが偉いと思ひます。考へる上に、妨害するやうな唯物論とか唯心論とかいふそんな邪魔物を絶対に置かんですね。あすこが偉いと思ひます。いろいろの哲学者のうちでも、一番作家にとつて興味があつて面白いですな。」（「横光利一氏と大学生の座談会」昭九・七）と述べている（ちなみに「日記」（昭九・一二）には、「私は哲学者の中で一番真面目に近いものは、ベルグソンとニイチェと思ふ」と記している）。認識論と文学の關係を模索し、文学の「勉

強」を「主観と客観の交流法則を、見詰めることだ。」（「書き出しについて」昭二・八）と規定していた横光は、そのアポリアを乗り越える鍵をベルクソン哲学に求めたと推察される。

さて、ベルクソン哲学においては、知性的自然科学的分析によって空間化された諸事象の根源に、分割不可能な時間の連続性を見いだし、人間の認識や精神と身体のある方などをその時間——「純粹持續」の観点から見直す作業がなされていた。横光は大正末期に、「自然の物理的法則を形成すると云ふことは、時間と空間の観念量を数理化すること」であり、「われわれの時代はあまりにその根本の意識の発生と同時に、われわれが科学のために洗はれてゐる」（「客体としての自然への科学の浸蝕」大一四・九）との見方を示していた。

さらに、自然科学と文学をめぐる考究を経て、「譬へば、われわれ人間の心理を、その心理の進行することを時間と見る場合、その時間内に於ける充実した心理や、心理の交錯する運命を表現し計算することの出来得られる科学は、芸術特に文学において他にはない。」（「芸術派の真理主義について（下）」／「読売新聞」昭五・三・一九より引用）との文学観に到達し、と同時に、「心理」・「時間」・「運命」（同右）への意識を強めていく。近代に生きるわれわれの意識、世界観は「時間と空間の観念量を数理化」する自然科学的分析から成るものである。しかし、科学的認識では把持し得ない領域が世界には存在している。そうした「われわれの了解出来得ざる範囲」（「文学

の実体について「昭四・九」を、「芸術特に文学」は計算し、表現することが可能なのだ。そう述べることで、横光は、科学と形而上学との臨界点に、文学の領域が存在することを想像したのである。

この過程で想定された未知の領域が、ベルクソン哲学によって「純粹持続」——「時間」として具体化され、作品「時間」の執筆に結びついたのではなからうか。また、「機械のやうな法則」が、人間の行為を含むあらゆる事象を決定論的に支配し、「私」から「自由」を剥奪するのに対し、自我の根底に流れる「持続」とは、「連統的に自らを形づくるたえざる創造」であり、そうした「真に内的な状態の外的なあらわれが、まさしく自由行為と呼ばれるもの」<sup>(7)</sup>となるように、機械論的世界観を乗り越える概念でもあった。加えて、ヴァレリーの「純粹自我」が、その絶対的普遍性によって人間の個性を抹消してしまうのと異なり、「純粹持続」を根源に据える思想とは、「(…)抽象的一般的なものではなく、まったく反対に、語の本来の意味でベルソネルな、すなわち個人的(個体的)人格的なもの」<sup>(8)</sup>であり、ヴァレリーから受けた「虚無」的印象から抜け出そうとしていた横光の志向を補完するものであったとも言えるだろう。

作品に現れた「私」の身体性についても、こうした観点から捉えることができる。ベルクソンは認識論における二元論的対立を溶解させるべく、「物質と記憶」の中で「イマージュ」論を展開しているが、そこでは、行動の中心である「私の身体」が、特権的・特殊のイマージュとして規定される。「私の身体」は、決定論的支配の下で

の非決定的要素となり、周囲のイマージュとの可能的関係の中で物質の知覚を構成するのであるが、これと存在Ⅱイマージュの「持続」・連統性という観点が結びつくことで、精神—物質の構造は「純粹記憶」——「純粹知覚」の定式に置換され、精神の緊張状態と弛緩状態という程度の差に捉え直される。このように認識論的アポリアを解消する契機である「私の身体」の概念が、横光に何らかの影響を与え、人間「心理」の文学的追求・表現においても、その「身体」性の側面を無視し得ないことが強く意識されたのではないか。先に示した「機械」における「心は肉体と一緒にびつたりとくつついたまま存在」であるという視点は、行動・知覚・記憶の中心である「身体」へと移行し、作品「時間」に反映していったと考えられる。

人間精神の法則を厳密に追い求める知性に絶対的価値を置き、観念論の極限へと至るヴァレリーのあり方を、横光は「科学」と平行して繰り返し批判した。自然科学とヴァレリーの思想とを同一視し、現実から遊離したその思考形式を批判するのは、当時の先端科学の成果を摂取しつつ人間精神の解明を試みた文学者としてヴァレリーが認知されていたことを考えると、自然な成り行きであったとも言えよう。しかし、ヴァレリーの膨大かつ多岐に渡る思索には、人間の「身体」をめぐる極めて今日的な探求も含まれていた。それは、「テスト氏」の「苦痛の幾何学」に始まり、「身体を最も深い存在の基盤に据えるテキスト」<sup>(9)</sup>である一連の詩篇等、さらには、「それまでの《純粹自我》を中心とするヴァレリー存在論を心身の二元論を超



克する方向で組みかえる枠組みの役割を果たす<sup>(10)</sup>」概念である「錯綜体」、および「第四の身体」に至る思考の軌跡である。ようやく作品の一端が紹介されたばかりの当時において、その全貌が明らかになるはずもなく、横光がこうしたヴァレリーの方向性を積極的に読み取っていたとは思えない。ただし、一時ではあるが熱狂的にヴァレリーへ傾倒した横光が、次々に翻訳されるその評論・作品から、人間精神の探求の過程に必然的に生じる「身体」への注視を無意識に感じ取っていた可能性はある。巨人ヴァレリーと横光の思考を安直に比較することは危険であるが、「文学者」としての認識論的探求という同一の課題を根本に据え、(レベルの差はともかく)近似した思考経路を辿ることで、ヴァレリーが不可避免的に帰着した「身体」の問題に、横光は足を踏み入れていたのではないか。

また、同時代に活躍したベルクソンとヴァレリーに関して、両者の思考に何らかの共通の地盤を見出し、そこに二十世紀初頭における西洋思想の一つの中心点を設定することは可能であろう。ヴァレリーの「純粹自我」から「第四の身体」への展開、ベルクソンの「純粹持続」および「イマジジュ」としての「私の身体」など、そこには人間の内的現実を追求した上で、「身体」を契機として認識論的課題を再考していく方向性が存在することは確かである。横光は、創作活動を通じて「主観と客観の交流法則」を探求するなかで、ヴァレリーの思想と出会い、かつその延長線上においてベルクソン哲学へと達した。それはまた、はからずも、新たな局面を迎えた西洋的

精神の課題の一端に触れることでもあったはずだ。それがどのような形で作品との関係を切り結んでいたかを再検討するとともに、激動の時代に、困難な思考を続けたこれらの思想家の試みが、横光の文学活動といかなる距離を持っているのか、もう一度新たな枠組みのなかで問い直されねばなるまい。

#### 注記

- (1) 菅野昭正は「横光利一」(河出書房新社平三・二)で、「機械」を「認識の書として見るならば、そこに欠けた部分がちらつく」として、この問題について指摘している。
- (2) 近年のまとまった研究としては、田口律男「横光利一「時間」論——「機械」からの変質——」(『山口国文』昭五九・四)・石井力「時間」論——「機械」と「殺菌」の架橋として——(『昭和文学研究』昭六一・七)・野中潤「イメージとシンボルの射程——横光利一「時間」論の試み——」(『文学と教育』平二・六)などがある。
- (3) 野中潤は前掲論文で、「時間に関する表現は、そのうちに「暫くすると」「初めの間」のように、大部分が数量化されない「主観的」なもので、この作品で問題にされている「時間」が計測可能な量としての時間ではないことと符合している。」と非常に示唆的な読みを提示している。
- (4) 市川浩「ベルクソン」(講談社学術文庫平三・五)
- (5) 田口律男は前掲論文で、こうした「時間」のあり方について、「(…)「時間」というものを、既存の概念でとらえるのではなく、生命の根源的な場所にまで遡行し、主体の意識との関わりで内在的に把握しようとする試みであったと見ていい。」と評価している。
- (6) この間の詳細に関しては、拙稿「横光利一——ポール・ヴァレリーとの邂逅の内幕」(『繡』平一一・三)、および「横光利一と自然科学——「形式

主義文学論争」前後を中心に——」（『文藝と批評』平一一・五）を参照して頂けたら幸いである。

（7）（4）に同じ

（8）小林道夫他編『フランス哲学・思想事典』（弘文堂平一一・一）のベルクソンの項より（執筆者坂部恵）。

（9）三浦信孝「苦痛の幾何学と身体思想」（『ヴァレリー全集カイエ篇4月報』筑摩書房昭五五・一二）

（10）同右全集本文中の三浦信孝による注より。

※引用は一部を除いて河出書房新社『定本横光利一全集』に拠るものである。

他は本文中に示した通りである。なお引用文献の漢字は適宜現行の字体に改め、ルビ等は省略した。